

## 中国新石器時代早期の河北中部の様相

小 川 誠

### A Study of Early Neolithic Cultures in the Middle of Hebei, China

Makoto OGAWA

#### はじめに

太行山東麓、燕山以南の土地は、中国東北地方と黄河中下流域一帯を結ぶ交通路のひとつに数えられる。そのため、該地の文化は、新石器時代を通じて多様や不連続という言葉で表現できるような複雑性を帯びていた<sup>(1)</sup>。このような、複雑な動きを見せる交通の要衝地の文化様相を知ることは、広大な土地に林立する中国の新石器諸文化が、互いに影響を及ぼし合いながら、いかなる過程を経て展開していったのか、その

仕組みを把握するための有力な手だてとなりうるであろう。なぜならば、交通の結節地には四方の文化の動きが直接伝わる、いわば、身体各部の動きを伝達し、全体の動作を支配する、関節のような役割があったと見なせるからである。

上記の理解のもと、本論は中国新石器早期段階<sup>(2)</sup>の河北中部の様相を観察していく（図1点線内）。新石器早期段階の交通の要衝地で人々がどのような生活を送っていたのか、その姿を微視的な視点からとらえることによって、この

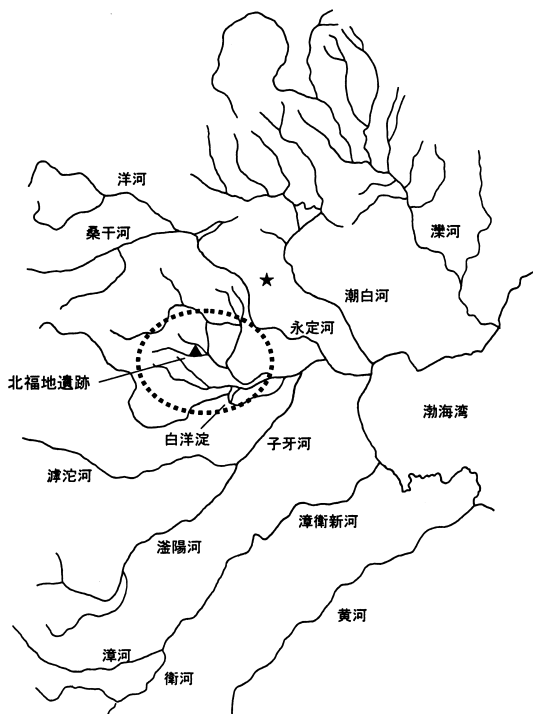


図1 河北省全体図

土地の新石器文化の初動時の様子を明らかにすることが本論の目的である。

河北省の中部地域は、河北平原の東北部にあたる。そこは、渤海湾に流れ込む複数の河川、その幾多の支流、及び湖沼群が混在する土地となっている。また、南北に延びる太行山東麓地帯の中間点にもあたる。

当地における新石器時代早期遺跡の発見は、管見の限り、1980年代に入ってからのことと思われる<sup>(3)</sup>。河北南部の磁山、河南中部の裴李崗、両遺跡の発掘が、それぞれ1976年と1977年であったのと比べると<sup>(4)</sup>、かなり遅れての発見ということになる。

嚆矢となったのは、容城県上坡遺跡の発掘であろうか<sup>(5)</sup>。当遺跡の簡報は、1999年発刊の『考古』誌上に載せられているのだが、発掘は、さかのぼること18年余の、1981年から82年にかけて行われ、しかもそれは、緊急救助的な措置であったらしい。そこでは、新石器早期に該当する上坡一期遺存を「上坡類型」と呼び、ひとつの独立した文化類型として把握している<sup>(6)</sup>。

その後、1985年、易県と涑水の両県で遺跡の調査と試掘が実施された<sup>(7)</sup>。この調査では、戦国時代を中心とした計33遺跡が精査され、そのなかで、涑水の炭山と易県の北福地が前仰韶期に属する最早期の遺跡と認定された。

北福地遺跡に対しては、その後、1997年、2003年、2004年に正式な発掘を行い、一連の成果が報告されている<sup>(8)</sup>。北福地は、河北中部の様相を知るための鍵となる遺跡であり、本論で子細に分析を加えていきたい。

北福地遺跡発見の翌年にあたる1986年、北京市南西部の房山区拒馬河流域で調査が行われた<sup>(9)</sup>。拒馬河は北京市に入る省境付近で、北拒馬河と南拒馬河に分かれる。工作隊は、両支流に挟まれた土地と北拒馬河の北岸で踏査を実施した。その結果、20の遺跡と15個所の遺物採集

地点を確認あるいは再確認した<sup>(10)</sup>。

遺跡のほとんどは、殷代以降のものであったが、そのなかの、鎮江営遺跡では、後崗一期文化よりも古い遺存が認められ、「鎮江営一期類型」と命名された。同遺跡はその後、1990年まで発掘が続けられ詳細な報告が公表されている<sup>(11)</sup>。

同じ1986年、保定地区の安新県で文物調査が行われた<sup>(12)</sup>。この調査では、梁荘と留村の両遺跡が試掘され、遺存の一部は、明らかに新石器時代早期のものであった。梁荘下文化層と留村下文化層である。どちらも出土量は少ないものの、遺跡の広がりを確認するのに貴重な資料を提供している。

この、梁荘、留村の試掘を最後に、新石器時代早期遺跡の報告はしばらくの間途絶えてしまう。そして、20年余を経た2007年に、ようやく新たな遺跡の発掘成果が公表された。容城の北城村遺跡である<sup>(13)</sup>。当遺跡は2006年に発掘され、新石器早期の文化層は3層に及ぶ。年代は、後崗一期文化よりも早い段階に属する可能性を有している。文化層が複数観察されることから、今後の展開が期待される遺跡である。

ここまで紹介してきたように、河北中部は、他地域と比較して、新石器時代早期遺跡の発見例が少ない<sup>(14)</sup>。このような状況のなかで、本論は、比較的精緻な報告が得られる北福地遺跡を中心に据え、観察と分析を進めてみることにしたい。

## 1. 北福地遺跡の観察

北福地遺跡は、太行山東麓の山並が途切れ、平原へ移行する地帯で発見された(図2)。そこは、拒馬河、易水、漕河等、幾多の河川が東流し、それらは合流しながら白洋淀の湖沼地帯に流れ込むという、大変水に恵まれた土地柄であった。そのような環境下、北福地の集落は、

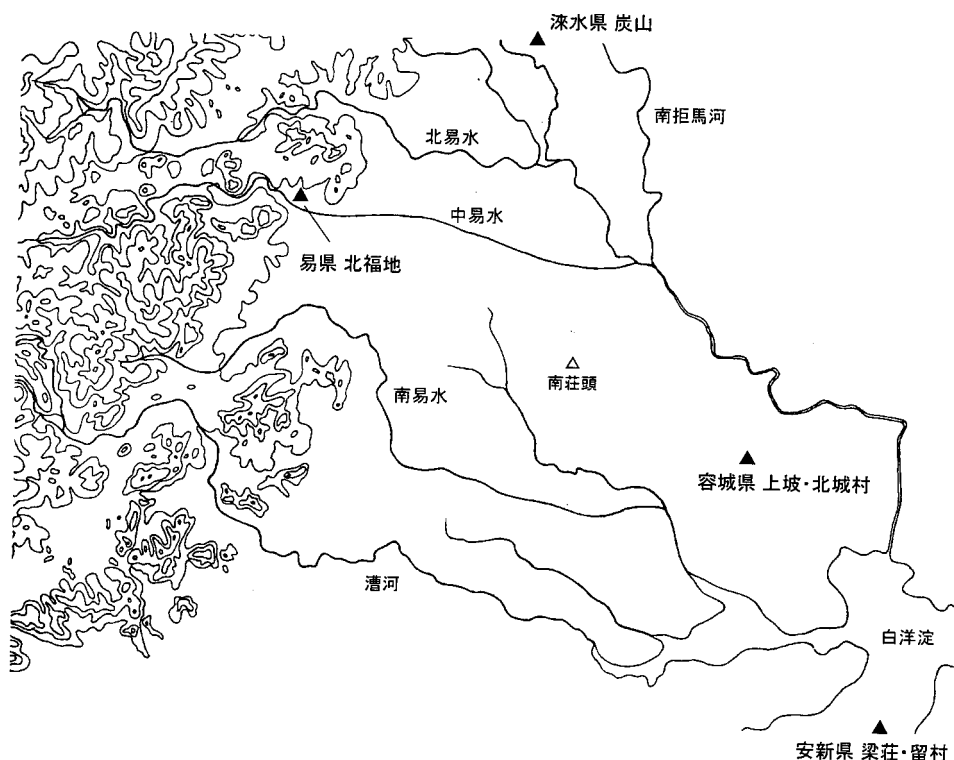


図2 河北省中部新石器時代早期の遺跡

標高400m 超級の連山の麓、海拔80m から90m をはかる、中易水の北岸台地上で営まれていた。植物相を除く当時の景観は、今日とほとんど変わらなかったものと推測される。

北福地遺跡の東、さらに白洋淀に寄った平原湖沼地帯には、すでに紹介した、上坡、北城村、梁莊、留村の諸遺跡が点在している（図2）。距離にして数十キロメートルの範囲である。ほぼ時期を同じくして存在したこれらの集落間に、何らかの通交があったことは容易に想像できる。

2003年と2004年、両年に渡る発掘の結果、北福地遺跡は、層序関係と炭素14年代測定をもとに、2期に分期された。北福地第一期文化と北福地第二期文化である<sup>(15)</sup>。前者は8000～7000年前、後者は7000～6700年前と推定されている。

最初に行われた1997年の発掘では、第一期文化を乙類遺存、第二期文化を甲類遺存と称し、

両者を新石器時代の第一期遺存として括っていた。当時は、甲乙両遺存の関係について十分な検証が得られず、それらは同時併存したのか、それとも両者に時間差が認められるのか、明確な判断が下せない状況にあった。2003年と2004年の発掘で、両遺存の前後関係を明らかにしたことは、研究上の大きな進展といえるであろう。

### 1-1. 北福地第一期文化

北福地遺跡の第一期文化からは、住居址14基、灰坑34基、及び「祭祀場」と名付けられた遺構1基が検出された。土器は全ての遺構で出土している。まずは、それらの紹介からはじめたい。

土器の胎土は、ほとんどが夾雲母陶である。住居址と灰坑の土器片を分析した結果を見ると、F1が夾雲母陶98.9%、夾砂陶1.1%、F12が夾雲母陶98.2%、夾砂陶1.8%である以外は、例外な

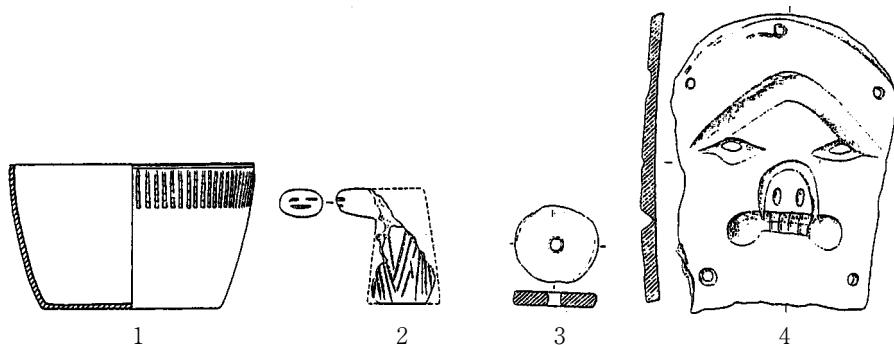


図3 北福地第一期文化の土器  
1. 直腹盆 2. 支脚 3. 紡輪 4. 仮面具

(縮尺 1,2. 1/10、3,4. 1/5)

く夾雲母陶が100%を占めている<sup>(16)</sup>。第一期文化の土器には、雲母を混在させた胎土が使われていた。色調は褐色系であり、表面のところが黒っぽい斑状になっている。

器種構成は単純で、直腹盆と支脚が大部分を占めている(図3-1,2)。その他、盤、鉢、筒形罐などの器種も報告されているが、出土数はごく少ない。

直腹盆は、器壁が直下もしくは斜直状に降下して広い平底に至る、円筒仕様の土器である。口部直下の器表には、一様に、折線、斜線等の反復文様が、刻劃もしくは圧印の手法でめぐらされている。直腹盆は、同じく腹部が直壁状につくられる筒形罐と異なり、口径が高さよりも大きい。罐ではなく盆と称される所以である。

直腹盆に次いで出土量が多い支脚は、中空のつくりで、靴を逆さまにしたような、倒靴形と呼ばれる形態を呈する。煮炊きの際に直腹盆を下支えする用途をもっていたことが想定される。

容器系以外の土製品としては、紡輪と仮面具をあげておく(図3-3,4)。特に後者は、北福地第一期文化を象徴する遺物となっている。

仮面具は、眉、目、鼻、口、歯を陽刻、陰刻、鏤空を組み合わせで表現した仮面様の土製品で

ある。仮面の周囲には、四隅に4個、あるいはそれに額上の貫通孔1個を加えた5個の孔が付く。なかには小型のものもあるが、多くが人の顔の大きさである。住居址と灰坑からは、復元可能なもの12点、残片145点が出土した。それらは、ほぼ例外なく直腹盆の腹部残片を利用してつくられている。

次に石器に移りたい。北福地第一期文化では大量の石器関連資料が確認された。それらは、①石材としての礫石、②製作過程中に生じた石核、剥片、石屑等の廃棄石材(廃棄料)、③完成品、半成品、欠損品、廃棄品を含めた石製品、④細石器、以上の4種類に分類される。

住居址と灰坑で出土した石器関連資料を分類したのが、図4のグラフである<sup>(17)</sup>。これを見ると、廃棄石材60%、礫石31%、細石器5%、石製品4%となっている。石屑等の廃棄石材と原材料である礫石が高い数値を示しており、これらを合わせると91%になる。なお、礫石に火熱で焼けたような痕跡は残されておらず、調理等、石器以外の用途に使用した可能性は薄い。

図4のグラフ中4%を占める石製品の内訳は、表1のとおりである<sup>(18)</sup>。斧、鏃、削刀、鏟、耜といった有刃器のほかに、墜、砺石、磨棒、磨

表1 北福地第一期文化住居址・灰坑出土石製品一覧

分類 遺構	石製品（完成品・半成品・欠損品・廃棄品を含む）															
	石碗	板墜	斧	鏟	杵	球	卵墜	削刀	鏟	砥石	餅形器	磨棒	磨盤	耜	廃片	
F1	4	1	10	1	1		1			73		2	1	1	19	114
F2	1	2	2			2				55	1		3	1	5	72
F3			1						1	6						8
F5			1				1	1		1						4
F6												1				1
F7														1		1
F8							1			1			1			3
F9			1							1						2
F10																0
F11			1							5	1					7
F12	1		2				2			4						9
F13												1	1			2
F15							1					1				2
F16			1				1			2		3	2		3	12
H52			1							3		1				5
H76	5		6				5	4	3	15		3	3			44
計	11	3	26	1	1	2	12	5	4	166	2	12	11	3	27	286

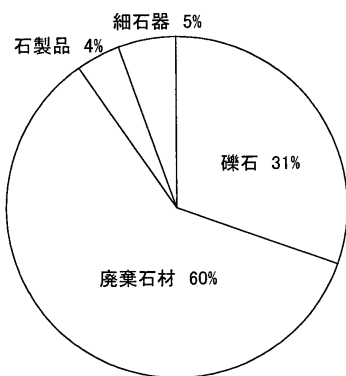


図4 北福地第一期文化住居址・灰坑出土石器分類図

盤など、刃部をもたない石器が出土している。削刀とは、先端に丸い刃部を作り出した小型の石器である。長さ4～8cm、幅2～4cmほどの大きさに収まる。また、砥石は、長さ10～25cmほどの楕円形の石器で、単面もしくは両面の中央に、摩擦のために生じたと思われる凹みを有している。砥石としての用途が考えられる。

第一期文化においては、砥石の数が最も多い。文化層出土例も含めた全ての石製品から計算される占有率は53%である（表2）。石製品の半数強が砥石であったことになる。砥石以下は、斧15%、墜9%、磨棒6%、磨盤・鏟4%、削刀3%と続く<sup>(19)</sup>。一連の石製品は、生業形態を考えていく際の重要な資料となってくるのだが、これらは、あくまでも、石器関連資料中約4%のなかの数値であることを明記しておきたい。

上記以外に注目すべき石製品として、石碗がある。石碗とは、石を素材としてつくった碗である。残片を含め10点以上が確認されている。復元の結果、口径は20～30cm、安定をはかるために丸底の底部は仮圈足状に仕立てられている。壁厚は5～10mmほど。器面の内と外は研磨され、特に内壁は琢痕が残らないまでに磨かれている。

## 1-2. 北福地第二期文化

北福地第二期文化からは、住居址2基、灰坑18基が発見された。第一期文化で見られた「祭祀場」のような特殊遺構は確認されていないが、灰坑のなかに特異な様相を示すものが散見される。

代表的な事例として、口径50cm、深さ35cmの小型円形灰坑（H91）に釜形の土器を埋め、釜の中に壺を重ね入れしたもの（図5）、また、深さ35cm、口径385×280cmの楕円形大型灰坑（H108）の底部隅にさらに穴を掘り、そこに、大型の土器を埋納した例があげられる。後者の灰坑から出土した大型の埋納土器（缸）は、腹部の最大径が50cm程をはかる、大口鼓腹小平底のつくりを特徴とし、底部上壁部に径2.3cmの穿孔が認められる（図6-6）。そのなかには、鉢と盆が口部を下向きにして放り込まれていた。特殊性を感じさせる遺構である。

そのほか、最大長が540cm、深さ275cmの巨大灰坑（H89）から土器や石器等の遺物、計3028点が出土したという事例も存在する。第二期文化の灰坑のなかには、単なる貯蔵穴以外の用途に使われたものがあったに違いない。さらに、ここで紹介した3例の灰坑は、第一期文化の祭

祀場と呼ばれる遺構を囲むように掘り込まれている。第二期文化の人達が、第一期文化の先住者を意識したとは考えがたいが、興味深い事例として紹介しておく。

それでは、土器の紹介をはじめたい。第二期文化の土器の胎土は、夾砂陶が多く、泥質陶、夾雲母陶がこれに続く。夾砂陶、泥質陶、夾雲母陶、それぞれの占める割合は、F1の出土土器片で見ると、64.4%、22.3%、2.3%、同じくF17、57%、26.9%、16.1%、同じくH89、67.3%、23.9%、8.8%、となっている<sup>(20)</sup>。土器の色調は、紅褐色、紅色、灰色に分けられる。文様はほとんど見られない。

器種構成は、第一期と比較して複雑多様化し、釜、支脚、器蓋、鉢、盆、壺、杯、缸などの器種があげられる（図6-1～6）。釜は、大口、鼓腹、丸底の夾砂紅褐色系の土器であり、出土数は最も多い。支脚、及び釜と同一口径の器蓋が

表2 北福地第一期文化石製品内訳

石製品	出土数	占有率
斧	50	15%
鏟	12	4%
鏹	4	1%
削刀	11	3%
鎌	1	0%
磨棒	20	6%
磨盤	14	4%
墜	29	9%
砺石	175	53%
耜	3	1%
他	13	4%
計	332	100%

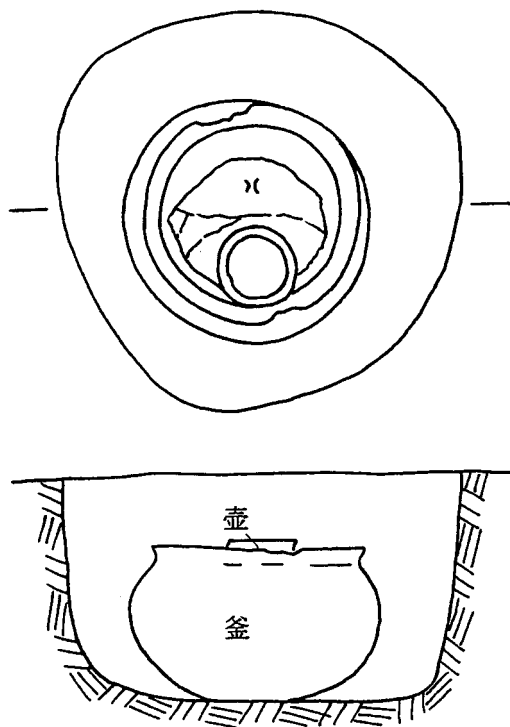


図5 北福地第二期文化91号灰坑（縮尺1/10）

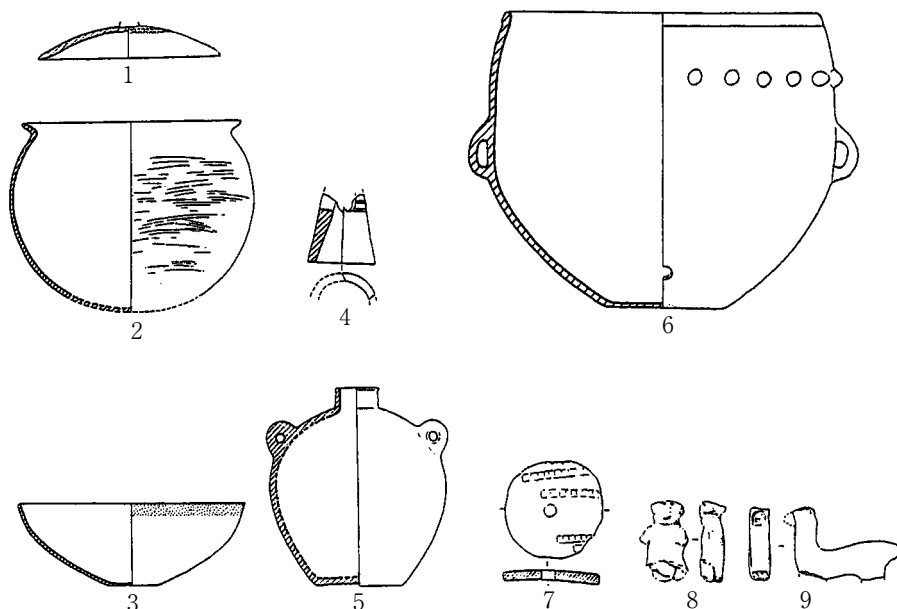


図6 北福地第二期文化の土器

1. 器蓋 2. 釜 3. 鉢 4. 支脚 5. 壺 6. 缸  
7. 紡輪 8, 9. 陶塑

(縮尺 1～6. 1/10、7～9. 1/5)

表3 北福地第二期文化住居址・灰坑出土石製品一覧

分類 遺構	石製品（完成品・半成品・欠損品・廃棄品を含む）											
	斧	彫刻刀	銚	鍬	磨棒	磨盤	削刀	石砧	砺石	耜	棒	廃片
F4									8			1
F17					1						1	2
H89	4	1	1	1		1	1		1			10
H96	3											3
H97	4		1					1	2	1		9
小計	11	1	2	1	1	1	1	1	11	1	1	33

出土していることから、これらを組み合わせた炊具としての用途が想定される。鉢は泥質で灰色を呈し、口部下に1.5～2.0cm幅の紅色帯がめぐらされている。いわゆる紅頂鉢である。釜、紅頂式の鉢と並び、第二期になってはじめてつくられたのが壺である。壺は、小口、有肩、斜腹、平底の土器で、肩部に双耳が付く。泥質紅陶もしくは泥質紅褐陶のことが多い。

容器系以外の土器としては、紡輪と陶塑がある（図6-7～9）。第一期を特徴づけていた仮面具は一切出土していない。陶塑は2点が判別でき、ひとつは人物像、もうひとつは動物をかたどっている。どちらも小型のつくりで、手に握ることができるくらいの大きさである。

石器に目を移したい。北福地第二期文化も第一期文化と同じく、多くの石器関連資料が出土

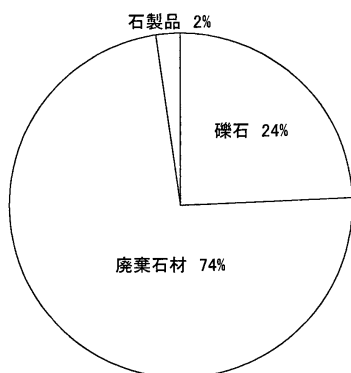


図7 北福地第二期文化住居址・灰坑出土石器分類図

した。内訳は、石核、剥片、石屑等の廃棄石材（廃棄料）が74%、以下、礫石24%、石製品2%と続く<sup>(21)</sup>（図7）。第一期よりも廃棄石材の割合が増え、礫石と石製品は、ともに占有率が落ちている。なお、第一期文化で石器資料全体の約5%を占めていた細石器は、出土していない。

図7のグラフ中2%を占める石製品33点の構成は、表3に示されるとおりである<sup>(22)</sup>。ほとんどが、1点、もしくは2点の出土数であるなか、斧と砺石がそれぞれ11点と目立って多い。

石器の数を補うべく、文化層出土例も含めた石製品の内訳をあらわしてみると、表4のようになる<sup>(23)</sup>。これを見ると、石器構成は第一期文化とほとんど変わっていない。しかし、占有率に変動がうかがえる（表5）。斧は15%から31%、磨盤は4%から12%、磨棒は6%から10%に増大している。これに対して、砺石は53%から14%に減少し、墜も9%から7%へと減少傾向を示す。これらを勘案するに、生業形態に何らかの動きが生じたと見るべきであろう。

## 2. 北福地遺跡の性格

### 2-1. 北福地集落の日常生活

北福地遺跡の第一期文化と第二期文化を観察した結果、当遺跡の特徴がいくつか浮かび上

表4 北福地第二期文化石製品内訳

石製品	出土数	占有率
斧	60	31%
鍬	12	6%
鏟	9	5%
削刀	8	4%
彫刻刀	1	1%
磨棒	19	10%
磨盤	22	12%
墜	13	7%
砺石	27	14%
耜	2	1%
他	17	9%
計	190	100%

表5 北福地遺跡石製品構成率の変化

石製品	第一期文化	第二期文化
砺石	53%	14%
斧	15%	31%
墜	9%	7%
磨棒	6%	10%
磨盤	4%	12%
他	13%	26%

がってきた。ここではそれらの諸点に着目し、遺跡の住人がどのような生活を送ってきたのかを考えてみたい。

まず、第一期文化、第二期文化ともに、石器の出土状況が、他の新石器時代早期の遺跡とは大きく異なる。ここでは、石製品以外に、石材としての礫石、製作過程に生じた石核、剥片、石屑等の廃棄石材（廃棄料）が大量に見られる。第一期文化では、住居址と灰坑から出土した礫石と廃棄石材の合計が石器関連資料中91%、第二期文化では、同じ条件で算出した両者の合計が98%であることは、すでに紹介した図4、図7のグラフから簡単に計算できる。石器の製作に深く関わる素材が大量に出土している事実は、北福地遺跡全体が石器製作に深く関与していたことの証となる。



もう少し具体的な例をあげてみたい。第一期文化の1号住居址(F1)では、礫石が1503点、廃棄石材が562点出土している。第二期文化の4号住居址(F4)は、礫石102点、廃棄石材123点を数える。これは、住居址出土遺物中の14.2%と16.9%にあたる。また、第一期文化では、長さ184cm、幅156cmをはかる、石を積み上げた石堆(S4)と呼ばれる遺構が検出されている<sup>(24)</sup>。このような、礫石と廃棄石材が突出して多い住居址、また石器製作場と受け取ることでできる遺構の存在も、上記の理解を裏付ける。

この遺跡の住人は、背景に山並を抱き、前面に河川と平原が展開する、水に恵まれた土地で定住生活を送りながら、石器製作に従事していたことになる。このような生活状況は、第一期文化の開始時期と目される8000年前を起点として、第二期文化が終焉するまでのおよそ1300年の間継続した。石器製作地としての役割は、長期間ほとんど変化することのないこの遺跡の特質としてとらえることができる。

次に、当遺跡の出土遺物を観察してみると、骨角器と動物骨が未見であることに注意が惹かれる。北福地遺跡は1000年以上の長期に渡って存続したが、動物骨及びそれを素材とした道具類が出土していない。さらに、鏃に代表される狩猟具も見あたらない。石器製作を盛んに行い、多種類の石器を産出しながら、石鏃が欠けているのである<sup>(25)</sup>。もちろん、落とし穴のような動物を捕獲するための遺構も検出されていない。これらのことは、鳥獣類以外の食料への依存度が高かったことを示唆しよう。

ここで、墜、磨盤、磨棒に着目したい。すでに指摘したように、第一期文化の石製品中それらが占める割合は、墜9%、磨盤4%、磨棒6%、同じく第二期文化では、墜7%、磨盤12%、磨棒10%である。

墜は、表面がなめらかな卵形の自然石を利用

してつくられ、両横もしくは片側に浅い溝、あるいは短軸に沿って凹槽を一周刻んでいる。第一期、第二期両文化の墜ともに、長径6~9cm、短径3~5cm程度をはかる。この大きさはよく手になじむ。刻まれた溝は、そこに縄を掛け、漁網の石錘として使ったことをうかがわせる。

磨盤は、扁平の石材を隅丸長方形あるいは楕円形に加工した道具である。いずれも中央部が摩滅し凹んでいる。一方、磨棒は器名のとおり、断面円形もしくは楕円形の長い棒状を呈する道具である。両者は組み合わせて使われたことが考えられるのだが、何故か、どちらも欠損品が多い。いずれにしろ、磨盤、磨棒は、縄文文化の出土例がそうであるように、堅果類の粉碎具としての役が期待できる。

実は、当遺跡では、堅果の残存物が数多く見られる。第一期文化の80号灰坑からはオニグルミ(*Juglans mandshurica* Maxim)が、同じ第一期文化の70号灰坑からはコナラ属の種子(*Quercus* Sp.)が出土した。ちなみに、灰坑の主要出土物をくまなく調べてみると、52基中15基でクルミ科の炭化物が検出されている。しかも、第一期文化に属する、23号灰坑と30号灰坑からは大量のクルミが発見されたとの記述がある。一部、写真も公開されている<sup>(26)</sup>。

段宏振の研究によるならば<sup>(27)</sup>、北福地に集落が構えられた8000年前以降、当地は寒暖の波動はありながら、気候はおしなべて温暖湿潤であったという。植生は、針葉樹と落葉樹の混交林を主体とし、湖沼の水性植物は豊富にあった。落葉樹にはクヌギやニレなどが認められ、古河道からはクルミの古樹が良好な保存状態で発見された。オニグルミは、川沿いや湿った土地に生える落葉高木樹である。北福地に居を構えた人達が、落葉広葉樹の堅果を食していたことに間違いはない。

当時の北福地遺跡が、白洋淀の湖沼地帯を近

隣に控え、大変水に恵まれた環境にあったことはこのような環境分析からも明らかである。魚骨こそ出土していないものの、墜を漁撈具として認めるならば、当地の住人は、落葉広葉樹と湖沼環境から得られる恩恵を十分に生かした生活を送っていたと見なすことができる。鳥獣への食料依存度は極めて低い。これらを総合して、当遺跡は、森林湖沼性の新石器文化の特徴を備えているといえるであろう。

先般、第一期、第二期両文化の石製品構成率を比較した際、斧、磨盤、磨棒の率が増加し、砺石と墜が減っていることを指摘した。ごく単純に考えるならば、そこからは、漁撈活動の衰退と、磨盤、磨棒を使用する食材の利用が増加したことを読み取ることができる。

これは、第二期文化の時期に気候が若干の冷涼化に向かったことと関係があるかもしれない。李月叢、許晴海の花粉分析結果によると<sup>(28)</sup>、6890～6711cal.aBPの間、本来、平均気温0～8度地帯に分布する針葉樹のトウヒ属(*Picea*)が一定量を占めるようになり、同時に、湿地を好む植物花粉が減少した。この時期、気候は現在の河北省中部よりも寒かった。それに伴い、針葉樹と広葉樹が混交する森林相は変化を見せ、河谷平原地帯に広がる湿地帯も減少した。湿地帯すなわち湖沼の面積が縮小したとするならば、漁撈具としての墜の減少は説明が付く。磨盤、磨棒の増加をどのように読み取るかは、結論を持ち越したい。ともあれ、森林湖沼地帯の新石器文化という基本的な性格は不変であったと見て差し支えない。

当時の生業形態を分析していくなかでひとつ不明なのは、農耕がどの程度の規模で行われていたかということである。土掘り具である鍬や耜の出土率は高くない。表2、表4中、鍬と耜の占める割合は、第一期文化、4%、1%、第二期文化、6%、1%となっている。

第一期文化の出土例を観察してみると、石鍬は、舌形の弧刃を有し、長さ10～15cm、幅6～10cmの範囲に収まる。全体の形は、窄体梯形を基本とするが、わずかに肩部を作り出したものも見られる。これに対して、石耜は、長さ30～50cmであったと推定されている。大型石器の部類に入る。欠損が激しいものの、尖刃有肩の仕様であったことが確認できる。石鍬の刃部には微細な仕様痕が残されており、実際に使われていたことが明らかである。石耜については、後述する祭祀場で、長さ46cmの耜が発見されていることも気がかりである。祭祀の場で特大の石耜が出土したことは、何を意味するのだろうか。農耕の重要性を示す指標となりうるのであろうか。

## 2-2. 北福地集落の非日常生活

森林と湖沼に囲まれ生活を営んでいた北福地第一期文化の人々は、祭祀場と呼ばれる特殊な遺構を残している。祭祀場は、東西10.8m、南北8.4mの範囲を有し、生活の場である第Ⅰ発掘区から60m程の距離にある第Ⅱ発掘区で発見された。

この遺構は、覆土、活動面、灰坑(H109)の三部位に分けられる(図8)。遺構の中核をなす活動面は、盛り土をした部分と地面をならした平坦な部分からなり、そこには、深さ10～30cmの不定形な浅坑が不規則な配列で9個確認された。盛り土は、最も厚いところで40cmを計測し、周囲に向かってゆるやかな傾斜をなす。活動面の南西隅に掘られた灰坑(H109)は、長さ252cm、幅78cm、深さ70cmの長方形を呈し、中からは、大量の木炭とともに直腹盆の残片が出土した。なお、盛り土の部分に、地面下を掘り込んだ土台のようなものは検出されていない。

遺物は、土器、石器、玉器など91点が出土した。興味深いのは、それらが11組の小さなまと

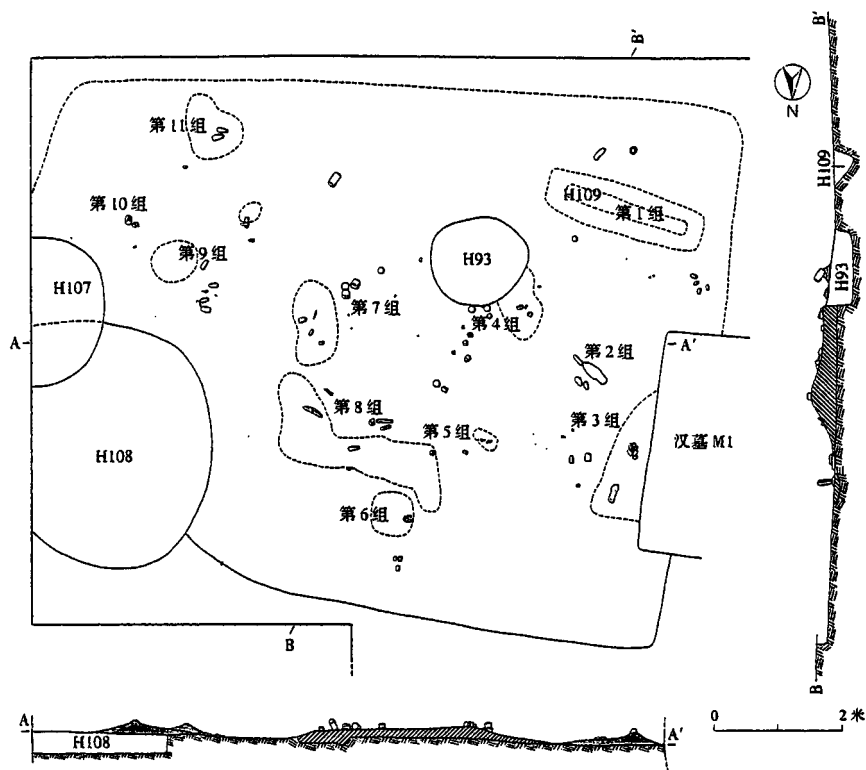


図8 北福地第一期文化祭祀場遺構

まりを形成していることである。出土遺物の総数が91点であるから、当然各組の出土点数は少ない。最大で14点、最少で3点である。上で紹介した浅坑との関係は必ずしも明瞭でないのだが、実測図を見ると、両者の関係が全くないともいえない。例えば、計4点が確認された第11組の場合、窪みの上に石斧と石鏟、窪みのすぐ脇30cm位のところに石斧、窪みから150cm程離れて筒形罐というように、浅坑との関連を想定させるような出土状況を示している。

遺物をもう少し詳しく観察してみたい。まず、35点を数える土器は、手制で小型のものが主体である。最も出土点数の多い直腹盆を見ると、第一期文化出土例は、口径25cm以上のA型45点（42%）、口径15～25cmのB型38点（36%）、口径15cm弱のC型24点（22%）であるのに対

して、特殊遺構出土の直腹盆は、A型0点、B型2点（図9-3）、C型17点（図9-2）と、C型が圧倒的に多い。ここでは、A型、B型、C型の占める割合が逆転している。さらに、計11点見られる口径9cm以下の直腹盆は、杯と命名され別器種として扱われている（図9-1）。ちなみに杯は、住居址や灰坑からは出土していない。

次に、祭祀場では土製の支脚が見られない点を指摘しておく。第一期文化の生活の間では、直腹盆と支脚が多数出土し、それらを組み合わせた使用形態を想定した。それに対して、ここでは、支脚を使った直腹盆による本格的な煮炊きが行われていなかった。もちろん、器の形が小さいために支脚は不要であったとする見方も成り立つが、それよりも、直腹盆は真似事のような使われ方をしていたと考えた方がよいよう

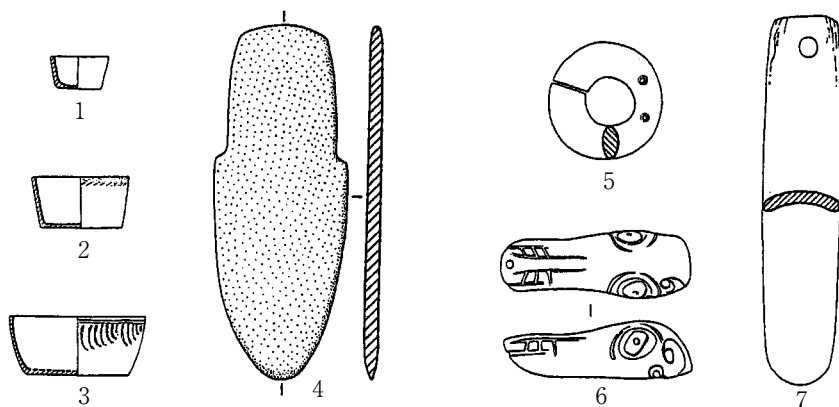


図9 北福地第一期文化祭祀場遺構出土遺物

1. 杯 2,3. 直腹盆 4. 石耜 5. 玦 6. 石彫  
7. ヒ形器

(縮尺 1～4. 1/10、5～7. 1/2)

な気がする。調理すること自体が目的ではなく、所作の過程で必要とされる器物であったために直腹盆は小型仕様のもので十分事足りたのであり、実際に支脚も必要としなかった。欠損品がほとんどないことも、このような理解を裏付けている。

石製品は41点が確認された。内訳は、斧16点、鏟12点、銚3点、鑿2点、刀1点、耜1点、磨棒1点、磨盤1点、墜4点となっている。石器は全体に精緻でよく磨かれており、欠損品がほとんどなく使用痕もわずかである。これは土器の出土状況と一致する。

先般紹介した大型の石耜は、先端に舌形の尖刃をもつ有肩耜であり、大きさは、長さ46cm、厚さ2cmをはかる(図9-4)。この石耜が属する第2組の遺物は全て石器で占められる。内訳は、石斧2点、石鏟1点、石耜1点である。浅坑との関連性はうかがえない。この第2組のように、規模はともあれ、石耜や石鏟といった農耕具中心の遺物のまとまりが見られることは、栽培が当時の人達の意識の一角にのぼる程度の重要性を有していたことの証左となる。

祭祀場遺構からは玉器が出土した。玦3点(図9-5)、飾件2点、ヒ形器1点(図9-7)である。第一期文化の遺構では玉玦わずか1点の出土であったのと比べると、数はかなり多い。当遺構の特殊性の所以であろう。玉玦はそれぞれ、直径2.8cm、3.1cm、4.6cmの大きさで、3.1cm径のものには、スリットの反対側に穿孔が2個認められる。玉器以外には、錐柱状の水晶、緑松石の飾り、獣頭の石彫(図9-6)などが発見されている。

以上の分析からも明らかなように、ここで出土する土器や石器には日常の場では見られない特異性が備わる。玉器や貴重石は住居址や灰坑よりも数多く出土する。盛り土、浅坑、灰坑を伴う全体のつくりも特殊である。このことは、当遺構が、少なくとも当時の住人の非日常的な側面をよくあらわした場であること。さらに、当地の住人が何らかの祈念行為を行った場であることを強く示唆している。報告者がこれを祭祀場と命名したもの、住居跡でもない、墓地でもない、野営地でもない、石器製作場でもないという特殊性を勘案した所以であろう。

ひとつ注意しておくべきは、第一期文化の住居跡で見られた仮面具が出土していない点である。仮面と祭は密接な結びつきをもつ。したがって、祭祀場遺構に仮面具が残されていてよいようなものであるが、1点も出ていない。これは疑問のひとつとして提起しておく。いずれにしろ、北福地第一期文化に属するこの特殊遺構は、新石器文化のいわゆる宗教関連の遺構のなかで最も早い部類に属するものといえるであろう<sup>(29)</sup>。

### 3. 北福地遺跡と周辺諸遺跡

河北省中部の森林湖沼地帯からは、北福地遺跡と同じ時期に営まれたと思われる集落跡が少数発掘されている。ここでは、それらの遺跡を、北福地遺跡との関連性という視点からまとめたみたい。

#### 【上坡遺跡】

容城県の上坡は、当地の新石器早期に属する遺跡のなかで最も早くに発見された<sup>(30)</sup>。遺跡は、北福地の東南約50kmのところに位置する（図2参照）。北福地の集落が山並と平原の境界地にあるのに対して、上坡の集落は白洋淀により近い河北平原の土崗上に営まれた。白洋淀からは約12kmの距離である。

遺跡は、第一期から第四期までの4期に分類された。そのうちの第一期と第二期が新石器時代に該当する。観察の対象となるのは、新石器時代早期の第一期文化遺存である。なお、第二期文化は仰韶晩期、第三期文化と第四期文化はそれぞれ先商期と晩商期の遺存となっている。

第一期文化の灰坑や文化層からは、土器、石器、骨器といった遺物が出土している。土器は紅褐色系の夾雲母陶を主体とし、直腹盆76点と支脚30点が確認された。直腹盆は大型（前出A型）のつくりで、口縁下に刻劃文や圧印文

を一周めぐらせたものが多く、支脚は倒靴形を呈する。他の器種は見られない。

石器は種類が豊富で、斧、鏟、鑿、鎌、耜、鏃、磨盤、磨棒、刮削器、帶坑窩石器などの道具が認められる。打製と磨製の両種があり、例えば石斧は、打磨両方の製法でつくられている。全体の統計をとるほどの絶対数はないが、このなかでは、帶坑窩石器16点、磨棒11点が2桁の出土点数となっている。帶坑窩石器とは、扁平な天然石や礫石に直径1～1.5cm、深さ1cm前後の穴を、3、4個から20個穿ったもので、用途は不明である。研磨具のような役を果たしたのであろうか。

上坡は、土器、石器のつくりや構成から見て、間違いなく北福地第一期文化の系統に属する遺跡である。もちろん、土製の仮面具、大量の礫石や廃棄石材、石器製作場、特殊遺構といった北福地第一期文化に特有な遺物や遺構は観察されないが、煮炊きの道具として直腹盆と支脚、食物加工具として磨盤と磨棒、翻土具として鏟や耜などを使いながら、北福地と同じような日常生活を送っていたと見て差し支えないであろう。

異なるのは、石鏃と骨器が出ていることと、墜が1点も報告されないことである。石鏃は打製であり、長さ2.7cmと3.8cmの2点、骨器は、長さ22.5cmと24.5cmの長身の錐2点、及び肩胛骨製の骨料1点を数える。これは、上坡の生業形態に、北福地とは若干の違いがあったことを示しているのかもしれない。

#### 【梁莊遺跡】

安新県の梁莊は、白洋淀の南側、湖沼地帯の中心に位置する遺跡である<sup>(31)</sup>（図2参照）。文化層は上層と下層に分けられ、そのうちの下文化層が新石器時代の早期にあたる。灰坑が2基、そのほか、孟と呼ばれる無文の直腹盆、壺、鉢、

罐、支脚等が見られる。文化層から焼土、獣骨、貝殻が検出されたとの略報もある。

直腹盆と、残片ではあるが支脚が確認され、また紅頂式の鉢が見られないことから、当遺跡は北福地第一期文化に類するものと考えられる。しかし、器種構成は多様化し、土器には泥質系のものが混在している。帰属年代は、北福地第一期文化と比べて若干下るかもしれない。

### 【留村遺跡】

留村は梁荘と同じく安新県に属する遺跡である<sup>(32)</sup>（図2参照）。遺存は上層と下層の堆積に分けられ、下層すなわち下文化層が新石器時代の比較的早い段階に比定されている。

土器は手制で泥質陶が夾砂陶をいくらか上回る。器種には、罐、支脚、器蓋、盆、鉢、碗、缸等があり、また鼎足とおぼしき土器片が出土した。石器は少量出土しているが、詳細は不明である。その他、猪骨、羊骨、魚骨、鰐甲等の報告がある。

留村の下文化層は、細泥紅陶の紅頂碗が見られることから、北福地第二期文化と同時期の遺存として扱うことができる。さらに、口部の残片から罐と命名されている器種が丸底の釜であったならば、文化のうえでも、北福地第二期文化の範疇に含まれることになる。実際に、罐と呼ばれる器種の口部と北福地第二期文化の釜の口部は見分けが付かない。いずれにしろ、留村下層は、上坡や梁荘下層よりも新しい時期の遺存である。

### 【炭山遺跡】

涿水県の炭山遺跡は、北福地の東北約30km、小河川に面した土崗上に立地する<sup>(33)</sup>。山並と平原の境界地という点において、北福地と似たような環境にある。遺跡は、第一期と第二期に分けられ、そのうちの第一期が新石器の早い段

階の遺存である。ちなみに第二期は、西周初年に帰属する。

土器は、夾砂と泥質の二種があり、釜、壺、鉢の3器種が報告されている。釜と紅頂式の鉢を根拠に、北福地第二期文化系統の遺存と見なすことができる。

### 【鎮江営遺跡】

鎮江営は、本論の対象としている河北中部の最も北寄りに位置する遺跡である<sup>(34)</sup>。鎮江営の住人は、北福地や炭山と同じく、背後に山並を控え前面に平原が開けた土地に居を構えていた。

時代区分は複雑である。まず、当遺跡は、隣接する塔照遺跡と合わせて、新石器から商周までの9期に編年される。そのうち、早い方の4期分が新石器時代に属し、最初の1期、すなわち新石器第一期遺存が新石器時代の早期に該当する。報告者はこれを鎮江営一期文化と命名した。年代は今から9000～7000年の間と推定されている。この鎮江営一期文化は6組の器物群に分類され、そこからさらに、計四段、早中晩に渡る分期が試みられる。第一段（1、2組）は早期、第二段（3組）は中期早段、第三段（4組）は中期晩段、第四段（5、6組）は晩期となる。要するに、鎮江営一期文化と呼ばれる新石器第一期遺存が早中晩の三期に分けられたと考えればよい。ここでは、早中晩を一括して遺跡の状況を見ていきたい。

第一期遺存からは、住居址、竈、灰坑、灰溝、計4種類の遺構が確認された。竈の発見はめずらしく、そのうちのひとつは紅焼土の両側が石で囲まれた状態で見つかった。土器は、夾雲母陶が約71%、泥質陶が29%という比率であり、無文のものがほとんどである。釜、鼎（鼎足）、鉢、盆、壺、瓶、器蓋、支脚、墜等がある。鉢、盆は紅頂式、壺は双耳の付いた小口のつくりであ

り、彩陶片が1片出土したことが報告されている。石器は、細石器、刮削器等の打製石器のほか、斧、鏝、磨盤、磨棒等が見られる。土器、石器以外に鹿角製と骨製の錐が出土した。骨錐の長さは、6～12cm程度である。

これらを総合するに、鎮江営の第一期文化遺存は、北福地第二期文化を含めた、時代幅の比較的広い文化と見なすことができる。報告者は鎮江営と後崗一期文化との関係を論じ、後者を鎮江営一期文化の継承者と位置づけている。

### 【北城村遺跡】

容城県の北城村遺跡は、白洋淀から程遠くない海拔13.2mの平原上に立地する<sup>(35)</sup>(図2参照)。同じ容城県の上坡遺跡は北城村から約3kmの距離にある。遺存は、第一段階と第二段階の両時期に分期された。前者は金元以降、後者は3層に渡る新石器時代の文化層である。

新石器文化の遺構としては、住居址15基、灰坑78基、溝6条が発見された。住居は平面方形もしくは長方形を呈する半地下式のつくりで、傾斜もしくは階段を付した入口が一側に設けられている。多数発見された遺構群の配置は必ずしも明確でなく、統一された企画性は確認できないという。

土器は、泥質陶61%、夾雲母陶38%、夾砂陶1%という内訳である。胎土の色は、紅陶が46%、灰陶と褐陶がそれぞれ27%となっている。容器には、釜、鼎(鼎足)、碗、鉢、盆、壺、瓶等の種類があり、それ以外に、器蓋と支座(支脚)が出土している。器表は無文例が多い。石器は100余点が発見された。数量豊富な斧、磨盤、磨棒のほかに、錐、鎌、杵、球、細石器等が見られる。鎌は出ておらず、また骨角器の出土も報告されていない。

釜と器蓋と支脚、紅頂式の碗、小口双耳の壺、以上の組み合わせは、北福地第二期文化と同じ

である。報告者も両者の関連性を指摘し、当遺跡を後崗一期文化へ向かう過渡的な性格を有すると結論づけている。

以上、河北中部の新石器早期に属する遺跡を6個所取り上げてきた。その結果、北福地第一期文化相当の遺跡が2個所、同第二期文化相当の遺跡が4個所確認できた<sup>(36)</sup>。それぞれの遺跡には北福地と異なる特徴が見いだせるものの、日常生活で使われた土器や石器の観察からは、北福地の住人と似通った生活形態をとっていたこと、すなわち北福地と同様の文化様式の広がりがあることが確認できた。そのようななかで、大規模な石器製作場や祭祀場を有する北福地遺跡は、突出した中心的な存在であったといえるであろう。

### おわりに

本論は、新石器早期の段階、河北中部地域において人々がどのような生活を送ってきたのかを微視的なレベルで把握することにあつた。北福地遺跡に対するこれまでの観察と分析の結果をまとめるならば、以下のようになる。

北福地遺跡は、第一期文化、第二期文化で文化様相を大きく変化させる。例えば、土器の中心となる煮沸具は、直腹盆から釜へと変化し、また、第二期文化になると紅頂式の鉢、新器種である壺がつくられるようになる。

非日常性を帯びた遺物、遺構においても、第一期文化では土製の仮面、祭祀遺構が発見されたのに対し、第二期文化ではそのような類のものが見られなくなる。しいてあげるとするならば、灰坑に穴を掘り土器を埋納するといった事例が散見される程度である。

このように、第一期文化と第二期文化では、それを担った母集団が入れ替わったのではないかと思われるほどの変化を、物心両面において

遂げている。

これに反して、通時的に変化が見られない要素も存在した。それは、生業形態と石器製作である。漁撈と堅果の採集と栽培に依存した生活形態は、自然環境に大きな変化がなかったことの証であり、湖沼性新石器文化は第一期、第二期を通じてこの土地に定着していたととらえることができる。また、石器製作地としての役割は、周辺諸遺跡を含めた当地の遺跡群のなかで、この遺跡に与えられた役割が長期に渡って不変であったことを意味している。

北福地遺跡は、このように、短期に変化する要素と長期に継続する要素が重なり合う構造をとりながら、1300年の長きに渡って存続してきた。生産用具に見られる持続性のうえに、生活用具に示される非持続的な流れがのって、ひとつの潮流を作り上げてきたと説明することもできる。そしてここにこそ、北福地遺跡の性格があらわれていると解することができる。さらに、北福地の集落は、石器製作を通じて、周囲の集落と何らかのつながりを継続的に有していたに違いない。

河北省中部地域では、少なくとも新石器早期の段階において、日常器の形態は変化を見せながらも、人々の生業形態は大きく変わることがなかった。これは、森林と湖沼という環境に多くの部分が規定される生活を送っていた所以である。今回取り上げた、北福地遺跡の事例で示されるように、変化のあるものと変化のないものを常に意識しながら生活の復元をしていくことは、当時の社会の動きを的確にとらえていくための有力な手段となりうるであろう。

## 注

- (1) 太行山東麓、燕山以南の地域的特性には、多くの研究者が注目している。例えば、段宏振は、当地が四方の文化の「辺縁地帯」に位

置するため、文化に「複雑性」「不連貫性」「特殊性」が見て取れること（段宏振「河北考古的世紀回顧与思考」『考古』2001年第2期）、また、該地を「走廊地区」と称し、その考古学文化には、「排斥性」「兼容性」「疎遠性」「多辺性」が備わると述べている（段宏振「太行山東麓走廊地区的史前文化」『河北省考古文集（二）』北京燕山出版社、2001年、所収）。

- (2) ここでいう新石器早期段階とは、前仰韶期、もう少し具体的にいうならば、後崗一期よりも早い段階の新石器文化を指して使っている。ただし、最古期の土器が発見された、徐水南莊頭遺跡（保定地区文物管理所、徐水县文物管理所、北京大学考古系、河北大学歴史系「河北徐水県南莊頭遺址試掘簡報」『考古』1992年第11期、などを参照）等、新石器最早期段階の遺跡は含めていない。
- (3) 早期に限定しない、新石器時代遺跡の発見は、安新県の留村で土器片や石器が出土したと報じられた1954年までさかのぼることができる（孫徳海「河北安新県留村発現新石器時代遺址」『文物参考資料』1954年第6期）。
- (4) 邯鄲市文物保管所、邯鄲地区磁山考古隊短訓班「河北磁山新石器遺址試掘」『考古』1977年第6期、及び開封地区文管会、新鄭県文管会「河南新鄭裴李崗新石器時代遺址」『考古』1978年第2期、参照。
- (5) 河北省文物研究所『北福地 易水流域史前遺跡』（文物出版社、2007年）、附録「容城上坡遺址の発掘」。河北省文物研究所、保定市文物管理处、容城県文物保管所「河北容城県上坡遺址発掘簡報」『考古』1999年第7期。
- (6) 発掘当初、上坡遺跡は磁山文化の範疇で把握されていた（安志敏「略論華北の早期新石器文化」『考古』1984年第10期）。
- (7) 拒馬河考古隊「河北易県涑水古遺址試掘報告」『考古学報』1988年第4期。



(8) 北福地遺跡の報告には、以下のものがある。

- ①河北省文物研究所『北福地 易水流域史前遺跡』（文物出版社、2007年）、②河北省文物考古研究所、保定市文物管理处、易県文物保管所「河北易県北福地新石器時代遺址発掘簡報」『文物』2006年第9期、③河北省文物研究所「河北易県北福地史前遺址の発掘」『考古』2005年第7期、④国家文物局主編『2004 中国重要考古発現』（文物出版社、2005年）中の「河北易県北福地史前遺跡」、⑤樊書海「易県北福地新石器時代遺址」『中国考古学年鑑1998』（文物出版社、2000年）、⑥樊書海「河北発掘易県北福地前仰韶文化遺址」『中国文物報』1998年8月2日、⑦拒馬河考古隊「河北易県涑水古遺址試掘報告」『考古学報』1988年第4期。
- (9) 北京市文物研究所「北京市拒馬河流域考古調査」『考古』1989年第3期。
- (10) 拒馬河流域は、早く1959年、北京市文物工作队によって調査が行われ、西周、戦国、漢代の遺跡を発見している（注9、北京市文物研究所報告、参照）。
- (11) 北京市文物研究所『鎮江营与塔照』（中国大百科全书出版社、1999年）。なお、鎮江营遺跡は、1959年の調査で発見されていたが、当時は殷周時代の遺跡として認識されていた。
- (12) 保定地区文物管理所、安新県文化局、河北大学歴史系「河北安新県梁荘、留村新石器時代遺址試掘簡報」『考古』1990年第6期。なお、留村遺跡自体は、注3で述べたように、1954年にすでに発見されていた。
- (13) 肖小勇、史殿海、方清、楊衛東、黄琢生「容城県北城村遺址発掘収獲」『文物春秋』2007年第3期。
- (14) 本文で紹介した遺跡に付け加えるとするならば、河北中部と南部の境界に位置する、正定南楊荘の第一期遺存が新石器時代早期に属

している（河北省文物研究所『正定南楊荘』科学出版社、2003年、などを参照）。この遺跡に関しては、本論で扱う地域からはずれるため、省略した次第である。

- (15) 北福地遺跡では、漢墓を除く遺存を第一期、第二期、第三期、第四期に分類した。そのうち、第一期と第二期の遺存は、遺構を含んだ異なる文化層の堆積（第3層と第2層）として確認されたもので、それぞれを、第一期文化、第二期文化と命名している。

それに対して、第三期と第四期は、第1層下の遺構（S2、H65、H51）及び出土遺物を拠り所とした分期であり、報告者は、これらの遺存を文化という範疇でとらえていない。ちなみに、第三期遺存からは、彩陶鉢や豆、第四期遺存からは、甗の腰部や鬲が出土している。前者は第二期文化よりも降った新石器時代中期、後者は、新石器時代以降に属する遺存であろう。

- (16) 注8、①河北省文物研究所2007年報告、289～292頁、附表四（一）～（七）、参照。
- (17) 図4のグラフは、注8、①河北省文物研究所2007年報告、297～300頁、附表五、附表六をもとに筆者が作成したものである。
- (18) 表1は、注8、①河北省文物研究所2007年報告、297～300頁、附表五、附表六をもとに筆者が作成したものである。なお、石器名称は、全て報告書に従っている。
- (19) 北福地第一期文化の全ての石製品を対象にした占有率は、注8、①河北省文物研究所2007年報告、301頁、附表七をもとに筆者が算出した。表2は、この結果をもとに筆者が作成したものである。
- (20) 注8、①河北省文物研究所2007年報告、293～295頁、附表四（八）～（一〇）、参照。ところで、本文でも指摘したように、第二期文化においては、夾砂陶、泥質陶が多くを占

めるようになり、夾雲母等は著しく減少した。この傾向は、当然、後続の第三期遺存にも受け継がれていくように思えるが、実際はそうではない。第三期の遺構出土土器片を観察すると、S2で、夾細雲母陶91.7%、夾砂陶5.5%、泥質陶2.8%、H65で、夾雲母陶100%という結果が出ている。夾雲母系の胎土が再度使われたことになる。

- (21) 図7のグラフは、注8、①河北省文物研究所2007年報告、297～300頁、附表五、附表六をもとに筆者が作成したものである。
- (22) 表3は、注8、①河北省文物研究所2007年報告、297～300頁、附表五、附表六をもとに筆者が作成したものである。なお、石器名称は、全て報告書に従っている。
- (23) 北福地第二期文化の全ての石製品を対象にした占有率は、注8、①河北省文物研究所2007年報告、301頁、附表七をもとに筆者が算出した。表4は、この結果をもとに筆者が作成したものである。
- (24) 第一期文化の石堆(S4)は、注8、①河北省文物研究所2007年報告の本文中では紹介されていないが、同報告書280頁、附表三で遺構の様子を知ることができる。それが具体的にどのようなものであるかは、同報告書225頁に掲載された第三期遺存に属する石製品製造場(S2)の実測図(図147)から類推することができる。
- (25) 本論では触れていない第一期文化の細石器のなかに、鏃を含む狩猟具が存在する可能性を探ってみたい。細石器は石器総数の5%を占める。総数は359点である。内訳は不定形の石片187点、石核12点、石刃27点、刮削器30点、廃棄石材103点となっている。掲載図を見る限り、鏃や尖頭器の類は存在しない。また細石刃を埋め込む植刃器も報告されていない。鏃系統の石器は皆無といって問題はな

いであろう。

- (26) 注8、①河北省文物研究所2007年報告、彩版三、参照。
- (27) 段宏振「白洋淀地区史前環境考古初步研究」『華夏考古』2008年第1期。
- (28) 李月叢、許晴海「北福地遺址孢粉分析」、注8、①河北省文物研究所2007年報告、附録五。
- (29) 祭祀を連想させる特殊遺構に関しては、王芬「中国新石器時代的宗教遺跡」『四川文物』2004年第4期の附表に一覧としてまとめられている。これを見ても、当遺構が類似遺構のなかで早い段階に属することがよくわかる。
- (30) 上坡遺跡の報告に関しては、注5を参照。
- (31) 梁莊遺跡の報告に関しては、注12を参照。
- (32) 留村遺跡の報告に関しては、注12を参照。
- (33) 炭山遺跡の報告に関しては、注7を参照。
- (34) 鎮江營遺跡の報告に関しては、注11を参照。
- (35) 北城村遺跡の報告に関しては、注13を参照。
- (36) 北福地第一期文化、同第二期文化に関しては、本論で扱った河北省中部地域を越えて、同様の器種構成あるいは類似した遺物が出土する遺跡を確認することができる。武安磁山、同牛窪堡、同西万年、正定南楊莊、任県卧竜崗、磁県下潘汪、同界段營などである。その分布範囲は、拒馬河を北限として漳河の流域にまで広がっている。本論は、新石器時代早期の河北中部を対象としているため、それらの遺跡については別稿にゆずる。

#### 図表出典

図1. 筆者作成。

図2. 『北福地』2頁、図1、をもとに筆者が作成。

図3.

1. 『北福地』88頁、図57-14。
2. 『北福地』104頁、図66-1。
3. 『北福地』109頁、図70-4。

4. 『北福地』 112頁、図72。

図4. 筆者作成。

図5. 『北福地』 169頁、図112。

図6.

1. 『北福地』 210頁、図138-5。

2. 『北福地』 202頁、図132-1。

3. 『北福地』 212頁、図139-9。

4. 『北福地』 208頁、図137-5。

5. 『北福地』 219頁、図144-1。

6. 『北福地』 221頁、図145-6。

7. 『北福地』 222頁、図146-5。

8. 『北福地』 222頁、図146-9。

9. 『北福地』 222頁、図146-10。

図7. 筆者作成。

図8. 『北福地』 139頁、図96。

図9.

1. 『北福地』 158頁、図106-1。

2. 『北福地』 157頁、図105-7。

3. 『北福地』 157頁、図105-1。

4. 『北福地』 146頁、図98。

5. 『北福地』 155頁、図104-2。

6. 『北福地』 155頁、図104-12。

7. 『北福地』 155頁、図104-6。

表1. 『北福地』 附表5、6、をもとに筆者が作成。

表2. 『北福地』 附表7、をもとに筆者が作成。

表3. 『北福地』 附表5、6、をもとに筆者が作成。

表4. 『北福地』 附表7、をもとに筆者が作成。

表5. 筆者作成。